

小説 神楽陽子

挿絵 高浜太郎

立ち読み版

私立
探偵

高須賀エリカの事件簿

痴情派AV撮影24時

III



FILE 1 〱 潜入ミッションスター 〱

FILE 2 〱 恥辱のオナニーキャンペーン 〱

FILE 3 〱 名門JKのキャバ嬢デビュー 〱

FILE 4 〱 淫獄のザーメンカジノ 〱

FILE 5 〱 白濁のバニークリスマス 〱

エピソード

007

040

098

146

193

250

登場人物紹介

Characters



たかす が 高須賀エリカ

高須賀探偵事務所の所長を務める伶俐な女性。以前は警官であったが警察組織の限界を感じて退職し、私立探偵となる。



ながさわ 永沢ユイ

名門「L女」に通う現役女子学生で、婦警になることが夢。勢いだけで突っ走り、転んでも懲りない性格。エリカに憧れ、強引に事務所の助手になった。

じんぐう じれみこ 神宮寺怜美子

エリカの元同僚である婦警。L女の卒業生で、ユイの先輩でもある。尋問の際には手段を選ばない、DSな性格。

前巻のあらすじ

魅惑のボディと美貌、知性も併せ持った女性——高須賀エリカ。警察組織の限界を感じて警官を辞職した彼女は、空回りばかりの自称相棒・永沢ユイとともに、頻発する痴漢事件や違法薬物の取引、校内で発生する異常行動の捜査にあたり、次々と解決する。

だが、これら一見無関係な事件は性的な興奮を異常に促進させる秘密兵器「グレムリン」の仕業だった。各国の要人が集まる万博会場で事件を起こそうとするテロリストによって強制的に発情させられたエリカは大勢の群衆やマスコミの前で淫らなオナニーショウをさせられ、見知らぬ男たちに奉仕させられてしまう。

元同僚の婦警・神宮寺怜美子の助けも得て難を脱したエリカだが、痴態の動画はすでに流出しており、淫らな姿を全世界に晒してしまう。そんな失敗にもめげず、エリカは今日も難事件に立ち向かうのだった。

けたたましいナレーションが響き、人数分の気配を歓声にする。

『お待たせしました、皆さん！ 本日のオークションはこちらが商品となります！』

ライダー姿で佇むエリカにスポットライトが当たり、一瞬目が眩んだ。

「くっ、やっぱり……」

鏡に交じってガラスがあり、そこから年配の男たちがエリカを物色している。

驚きも大きかったものの、エリカの頭の中では辻褄が合っていた。

（オークションですって？ 派手なことをやってるじゃないの、こいつら）

黒泉院ヒルズのどこかに例の裏チャンネルに通じる集会場があるはずで、女性従業員が行方不明になる、という噂も流れている。

行方不明になった女性たちは、あのカジノに連れて行かれたのではないだろうか。その推理はいささか早計にしても、ここで女性が「出品」されていることは事実である。

『紹介が遅れました、今回の女性は二十階でキャンペーンガールを務めている、二十六歳の高須賀エリカ！ ごゆっくりとお品定めくださいませ！』

欲望まみれの競売に掛けられてしまったエリカは、心の中で舌打ちした。

（二十六歳は余計よっ！）

逃げ場がないとはいえ、精神的には余裕がある。仮に事前にこのオークションの存在を知っていたとしても、商品に成り済まして忍び込むことを考えただろう。

女探偵の目的はここから逃げるのではなく、情報をひとつでも多く入手することだ。嵌められたフリに徹し、我が身をかき抱く。

「ど、どういうことよ？ モデルの依頼じゃなかったの？」

狼狽するポーズを故意に取りながら、エリカは上手く声を震わせた。肉付きのよいお尻を後ろに引つ込め、男たちの視線を少しでも振り解く。

豊満な巨乳は隠したくても抱えきれず、曲線をアピールする挑発的な仕草になった。ライダースーツによつて黒光りする肉体を、深紅のロングヘアがなぞり降ろす。

『ほお……これは上玉でございますなあ』

ガラスの向こうでは、男どもが下卑た笑みを一にしていた。この地下オークションに集まっている連中は共通して太り、似合いもしない貴金属を通ぶつて身に着けている。

（成金丸出しね。品のない奴らだわ）

その素性まではわからない。どの顔も悪趣味なアイマスクで隠されていた。

エリカは表情を引き締めすぎないように、緩く息を吐きながら、チャンスを待つ。

『ワシは春日翔子を買えると聞いて、飛んできたんですがのう』

『ミスター・Lはあのモデルのファンでしたな、ハハハ』

コードネームで呼びあうなど、連中はなかなか用心深い。もしかすると、互いに正体を知ることなく参加している可能性も考えられた。

(もしかしたらKって男もここに?)

スポットライトが脚線を這い上がり、胸の膨らみを舐めるように照らす。

『それでは下着の色から確認しましょう! どうぞ!』

鏡の隙間から筋肉質の男たちが現れ、ふたり掛かりでエリカを羽交い絞めにした。

「放しなさいったら! こんなコトして、ただで済むと思ってるの?」

「へへへ、気の強い姉ちゃんじゃねえか。カネがありゃ俺が買いたいくらいだ」

さしものエリカでも二対一では分が悪い。ライダースーツを縦断するジッパを、上から下へと少しずつ降ろされていく。

(今は抵抗するより、被害者のフリをするべきだろうけど……)

重たい乳果を支えるのは紫色のブラジャーだけとなり、肩紐が牽引された。

片方の膨らみだけでもキロ単位の重さだ。紫のレース生地が、色白の肉体に実った曲線の存在感を際立たせる。

熟したメロンくらいは優にある圧倒的なサイズである。にもかかわらずボディラインを破綻させることなく、左右対称の曲線が美しい。

(こんなことなら、もう少し普通のブラを着けてればよかつたわ)

このサイズとなると、市販のブラジャーは派手なデザインばかりが多かつた。それこそ男性に媚びるためのものを日常的に着用するしかなく、ライダースーツからアダルティッ

くな色気が溢れ返ってしまう。

ジッパ―はおへその下まで開かれ、ブラジャーと同色のショーツもちらりと覗けた。総レースの薄生地はそれなりに値が張るものであり、高級感さえ醸し出す。

『これはこれは……カラダも極上ですが、下着のセンスも最高ではありませんか』

『肌の白さも素晴らしい！ 今日が高額の競りになりそうですね』

パイヤードもは名品を評価するかのように、柔肌の白い光沢を吟味していた。ライダースーツの黒色が肌の露出をくつきりと浮かび上がらせる。

「こいつらはなんなの？ あうっ、あなたたちも」

エリカは故意に力を弱めながら、男の手を振り解く素振りを見せた。

「へっへっへ、ノコノコやってきたあんたが悪いんだよ。なあに、悪い話ばかりじゃないぜ？ 奴隷として気に入られりゃあ、贅沢もできる」

「……まさか、今までにもこんなふうな女性を誘拐して……」

冷静な質問を投げかけては、警戒されるかもしれない。言葉の途中で押し黙り、あくまで「何も知らない被害者」のフリを意識する。

「人の心配より自分の心配をしたらどうだ？ さあつて、どれどれ」

左右の男がそれぞれブラジャーの肩紐を引っ張った。ストラップがずれると、バストカップが果物の皮のように剥がれてしまう。

ポリユームたっぷり乳果は裸同然となり、開放的に揺れ弾んだ。たわわに実った、それこそ「果実」と呼んでも語弊のない膨らみが、エリカの肺を圧迫する。

「ジロジロ見ないで頂戴……けがらわしいっ！」

それは本音であり、あえて反抗的な態度も織り交ぜて揺さぶる作戦でもあった。しかし男どもの粘着質な視線に絡みつかれ、エリカとて怖じ気を禁じえない。

とりわけ目立つのが桜色のニップルだ。胸が大きい割に乳輪の円自体は小さく、突起が寂しそうに尖っている。

（オトコつてのは、すぐ胸とか……あとで憶えてなさいよ）

エリカは頬を赤らめ、熱くなり始めた羞恥に耐えなければならなかった。今だけ、今は情報のため、と自身に言い聞かせながら、歯をぎりりと食い縛る。

「男をよく知ってそうなカラダだぜ。姉ちゃん、どれくらい経験があるんだ？」

「誰があなたなんか、そんなこと……んあ？ か、勝手に触らないで！」

ふくよかな巨乳の麓ふもとへと男の手が潜り込んだ。せっかく嘔み合わせた奥歯が離れ、意図になく色っぽい吐息を散らしてしまう。

特大の乳果実は出来立ての餅みたいな弾力を有しつつ、その柔らかさで男たちの手遊びてすまを促した。緊張感のせいで柔肌は感度が高く、望むはずもない愛撫に声が震える。

「やめてったら、あつ、あふう？ この変態！」

これも演技だ、と割り切る自信はなかった。入浴などの際に自分で触る分には問題ないのに、異性の手でまさぐられると、肉体を作り変えられていくように感じる。

触ってやる、モノにしてやるという下品な欲求が、曲線をダイレクトになぞるのだ。高く豊満な肉体が、性欲の捌け口として貶められていく。

(こいつら、もしかして慣れてる?)

双乳は片方ずつ搾られ、内側の圧迫感を乳頭まで押し上げられた。麓のあちこちで指が食い込み、ポリユームを好き放題に堪能される。

「すげえデカさだぜ！ 今日の俺たちはツイてるな」

次が読めない手の動きに悪寒がした。けれども背筋の冷たさとは対照的に、柔乳はじわじわと温もり、吐息に熱を含め始める。

「んあああつ？」

気付いた時には、唇が甲高い声を響かせていた。顰めていたはずの眉も弛緩し、顔つきから持ち前の気概が褪せていく。

「よくなってきたんじゃねえのか？ へへへっ、姉ちゃんよお」

「そんなわけ、はあ、ないでしょう？ バカにしないで」

眉を引き締めなおすだけのことで、意識を集中させなければならなかった。切れ長の目も状況の観察を忘れがちになり、肌の大膽な露出ばかり気にしてしまう。

年配の紳士たちは悠々と葉巻を噛み、せせら笑っていた。

『カラダのほうは最高級ですが、性格にかなり難がありそうですね。ふう……僕はもつと従順な奴隷が欲しいんですよ』

『ハッハッハ！ ミスター・Kはわかってらっしゃいませんな。反抗的な女ほど、調教のしがいがあるものですぞ。屈服するまでいたぶってやるのが面白いのです』

その名前が探偵の耳に鮮明に残った。

(ミスター・K？ まさか、あのKのこと……?)

Kと呼ばれた男の風貌は二十歳前後であり、連中の中でも比較的若い。エリカの知るKの年齢とも一致する。

ここでKに競り落とされれば——女探偵の脳裏に危なっかしい閃きがよぎった。

「あふうんっ！ そ、そんなふうに触られたら、もう私」

エリカは自ら両膝を落とし、男たちの乱暴な搾乳に屈してしまふ。

乳突起はしこり、ひくひくと疼きを漲らせていた。性感帯の神経が剥き出しになっており、指で弾かれようものなら、痺れが肩まで伝わってくる。

「そうだぜ、楽しんでまいな。クリスマスにはちと早いかなあ」

さらに後ろからお尻を撫でられ、太腿の付け根を無遠慮にまさぐられた。流麗な曲線で構成された下半身を、品定めついでに吟味される。

「このケツもなかなか……後ろからされるほうが好きだったりするのか？」

「勝手なこと言わないで、くうつ、誰があんたなんかと、んああ！」

演技ではない嬌声が吐息もろとも溢れてしまった。悩ましい声色と紅潮する表情が、ライダー美女の苦悶ぶりをありありと物語る。

お尻の谷間を穿るほじようになぞられつつ、肉付きのよい太腿にも手を這わされた。

女性用のライダースーツだけあって、ウエストは窮屈な作りであるものの、ボトムには充分な容積が確保されている。しかしエリカの肉感的なスタイルは、生地表面にまで曲線を浮かび上げらせ、食い込みも見た目からしてきつい。

「ちよつと？ どこに突っ込んで……ン、ずれちゃうじゃない」

生地越しであっても肌をダイレクトになぞられる感覚がした。男の手つきが円を描く理由が、お尻の形のせいだとわかってしまう。

前方からはライダースーツの綻ほころびへと手を差し込まれ、ショーツのサイドを解かれそうになる。火照り始めた肉体はぞくぞくと震え、敏感そうにのけぞった。

鮮やかな深紅のロングヘアをかきあげられ、裸の巨乳へと落とすように流される。

「入札があつたみたいだぜ。ほらよ、あそこに数字が見えるだろ？」

正面の頭上にはパネルに数字らしい表示があつたものの、文字化けを起こしていた。入札の額は想像するしかない。

『早速どなたかが大きく掛けられたようですな』

カラダを玩具みたいに金で買われるなど、屈辱でしかなかった。

(必ず後悔させてやるわ。この私を嵌めたことをね)

弱気になりがちな羞恥心を怒りで紛らわせ、ガラス越しに資産家どもを睨みつける。

ライダースーツの中は汗ばんでしまい、熱が溜まりやすくなっていた。はだけた胸が照り返り、牝のにおいを漂わせる。

「奴隷の仕事で一番多いのはコイツだからな。さあて、テクを見せてもらおうか」

ふたりの男はいそいそとズボンを降ろし、醜い肉の塊を振り上げた。

女性を辱めることを目的として膨張したペニスだ。ライダー美女の痴態に相当興奮しているらしく、すでに龟头がエラを張っている。

(私に何をさせるつもりよ、こいつら)

肉棒はどちらも太く、サオの表面で血管を盛り上がらせていた。グロテスクな異様が生理的な嫌悪感をもたらし、とても直視などしてられない。

その生臭い先端を頬になすりつけられた。

「ほらよ、まずはフェラチオだ。しゃぶってイかせろ」

「そんなこと、できるわけないでしょう？ あくう、押し付けけないで！」

下劣な欲望で熱くなったチンポが、エリカの美貌を挟み撃ちに。これでは右を向いても

左を向いても、男性の雄々しさを見詰める羽目になってしまう。

(フェラチオだなんて……)

口奉仕の経験はあれども、自ら望んでしたことはなかった。排泄器官を唾くわえる、などという行為はエリカにとって男女のスキンシップではない。

嘔むせるほどの尿臭に、嗅覚が痛覚でもあることを思い知らされる。

「気持ち悪い……近づけないでって、んはあつ、言ってるじゃない！」

「もしかしてしゃぶつたことがねえのか？ へへへ、いい反応じゃねえか」

男たちは調子に乗り、エリカの動きを封じることが忘れていた。ここで彼らに蹴りの一発でも食らわせ、逆に締め上げるのは簡単だろう。

しかし暴れたところで状況が変わるわけでもない。すぐ向こうにKの存在もある以上、ひとまず「商品」として従うほかなかった。

「わ……わかつたわ。舐めればいいんでしよう？」

「そうそう、素直が一番だぜ。お前はもうここで買われていくしかないんだ」

エリカは膝立ちの姿勢をKに向け、おずおずと二本のペニスを手に取る。

上手な女性であれば、握って扱っただけで果てさせることもできるそうだ。しかしエリカにそのようなテクニクがあるはずもなく、舌を出すしかない。

(今だけよ。なんとかKに買われれば……)

亀頭はふたつとも赤黒く、便所の異臭を漂わせていた。呼吸器官を汚染され、息をするだけでも苦しくなってくる。それでもエリカは唇を開き、右の雁太に舌で触れた。

「んええあ……へはあ、どうかしら？」

剥き出しの亀頭を舌でぬるりと撫でてやると、男が急に発作を起こす。

「うおっ？ ハア、その調子だけ！ もっと強く握ってみろ」

先端をほんの少し刺激しただけなのに、肉棒は根からのたうった。エリカの手にびくんと生きた脈動が伝わってくる。

「俺のもしやぶれよ？ おお、そうだそうだ！」

「んあつむう、ぶは、あ……くさいのよ、どつちも」

いかにも不潔そうな排泄器官を嫌悪しつつ、エリカは二本のペニスに舌を這わせた。右から左、左から右へと唾液の糸を伸ばし、少しずつ牡の味を舌に染み込ませていく。

肉棒は早くもガマン汁を滲ませ、エリカ自身の唾液まで苦くした。

「んおぐ、いっ、一本ずつじゃダメなわけ？ 息が続かないわ」

上目使いで見上げると、男たちががぶるつと腰を震わせる。

「喋ってるヒマがあつたら、もつと舐めろ。ハア、こいつはなかなか……」

生乳を放り出して二本のチンポを舐めまわす、ライダー美女の痴態は、オークションを大いに盛り上げた。頻繁に入札があり、性奴隷としての商品価値が上がっていく。

(そうよ……Kでなくとも、誰かに買われれば)

それが女探偵の狙いであるなど、誰も思うまい。オークションの状況そのものはエリカにとつて、決して悪くはない流れである。

ただしそのためにもフェラチオを続けなければならぬ。エリカは向かい合わせの亀頭をくつつけ、同時に舐めあげるテクニクを見せ付けた。

「こうひゅれば、えあむ……えふつ、ン、どつちもいっぺんに」

握力も強め、サオにありつた指の指を巻きつける。グローブのおかげでグリップが効きやすく、爪を立ててしまうような失敗もない。

「いいぜ！　ハア、このニオイが病み付きになりそうなんだろ、ほらよお」

「えれおお……あんまり調子に乗ってんじゃ、えあむ、ないわよ？」

舐めるだけでなく、鼻を押し付けて嗅ぐ有様まで晒してしまった。そこまではするつもりはなくとも、ペニス二本とも無理やり接近してくる。

頭の中は熱を帯び、己の息遣いがやたらと反響した。思考自体は冷静なはずだが、気分がおかしくなりそうだ。

(ヘンなこと考えちゃダメよ。これは作戦で……)

淫らな口奉仕をさせられている自覚が、女であることを惨めにする。

「ぶはあつ！　へれあ、動かさないでつたら」

切れ長の目は凜々しさを保っていたものの、唇を拡げて舌まで出す顔つきは恥ずかしく、みっともなかった。牡の味で飲めなくなった涎よだれを垂らし、自ら豊乳をぬめ光らせる。

ヌチュチュ！ ギュルツ、ズルズル！

凹へこんだ雁首へのキスが猥音を奏で、エリカに口淫を強烈に自覚させた。

セックスの快楽を知っている肉体が、だんだん熱くなってしまう。

(……このまま犯されるなんてことになったら)

フェラチオを無理強いされ、発情などするはずがない。しかしペニスを見てみると、女の生殖器官も意識せざるをえないのである。

ライダースーツの股底は蒸れ、ショーツに淫液を溜めつつあった。

「もうじゅうぶん、れしょ？ つんあ、これくらいで」

太腿を閉じ合わせれば、股座でぬちゃつと液が広がる。スーツの密封性が高いせいで、その感触から逃れることができない。

「おおっと、ハア、まだまだ……ちゃんと啜えてもらわないとなあ」

左のペニスがエリカの唇に狙いをつけ、突進してきた。

涎で濡れた唇に、肉太が強引に割り込む。

「ソうぐつ!? あるが……えおつ、おとおお」

さらに奥へと捻り込まれ、反射的に不快な嘔吐感が込み上げた。

咽が詰まりそうになり、鼻で呼吸をするしかない。鼻の穴を膨らませて紅潮する、はしたない表情を嘲笑される。

「いいカオもできるじゃねえか！ こつちを見てみる、ん？」

「れえお！ そんなおぐつまれ、ンむう、つつろまなれえ……ッ！」

瞳は瞬きを忘れるほど強張ってしまっていた。男を睨むつもり視線は媚び上手な上目使いと解釈され、女の価値を貶められつつ、牝の値を高くつけられる。

『ミスター・Kがいらないと仰るのでしたら、ワシの秘書にしましょうかの』
次々と入札され、価格は高騰する一方だった。

唇を後ろに引きずり、なんとか結合を浅くすることには成功する。その代わり舌がダイレクトに龟头を転がす羽目になり、不屈き者が必要以上に悦ばせてしまう。

「んちゅうう……つぶはあ！ あごが疲れへ……えれああ」

「こいつ上手いぞ？ ハア、いい吸い付きだ！」

ペニスを果てさせるなら剥き出しの先端を集中的に刺激すればよい、という猥褻の知識はあった。早く終わらせるためにも、雁首の括れで唇をきつめに窄め、吸引する。

もう一本はサオを握り、尿道のガマン汁を押し出してやった。むしろ彼らのほうが苦悶を見せ始め、テコキだけでは満足に至らない男が腰を進めてくる。

「次は俺だ！ 代われよ、相棒」

硬さと太さを兼ね備えた二本目も、エリカの慎ましやかな唇を突き破った。遠慮もなければ加減もなく、エラつきの雁太で口の中をかきまわす。

「あむううッ！ うごかひちや、えぐ、ンうう？ れもおおおっ」

歯を立てることもままならない大きさで、溜まった涎をかき出された。

唇と舌で、男の興奮が熱いものに感じられる。

（出すつもりなんだわ、こいつのチンポも……私の口の中で）

舌で擦りたてられながら、せっかちな肉棒が脈を打った。エリカの温かくて窮屈な唇が気に入ったらしく、ガマン汁がやたら苦い。

「突っ込まなくつれも、えあむ、くわえるっはら」

「こいつはマジでいいぜ……ウツ、絡みついてきやがる！」

男たちはエリカの唇を、それこそ穴として扱い、交替で抜き挿しした。フェラチオだけでなくしっかりと握らせ、休みなしにサオを扱かせる。

（情報を……集めなくちゃいけないのに）

肉体とともにだんだん頭もぼうつとしてきた。苦手な口奉仕にもかかわらず、雁首に舌を巻きつけるのが当たり前になってくる。強く吸うと、味が濃くなるような。

「ンっ、あむふ……ふあつは、はあ、つぎはこつち……えれえお」

心ならずもエリカは半ばとろんとした目つきになり、二本のチンポを順番にしゃぶって

いた。押し込まれるより先に自ら唇を拡げ、亀頭に濁った涎を滴らせる。

ズチュウ！ ズチュウ、ズルルル！ ズズズ！

吸い音はマイクで拾われているのか、オークション会場に大音量で響いた。

『あんな手つきで扱かれたら、たまらんでしようなあ』

ハンドシェイクは男性の自慰ほど作業的にはならず、くすぐつてあやすような動きだ。どうすれば男を悦ばせることができるか、肉体が覚えてしまっている。

曝け出された柔肌は赤みが差すほど火照り、玉の汗を浮かべていた。巨乳に滴り落ちるところだった涎が吸い上げられ、口奉仕を潤わせる。

「へはっああん、こんな……コト、してる場合じゃないのよ？ んふっ、私は」

再びエリカはふたつの亀頭をくつつけ、一緒くたに舐めあげた。中毒性の強いにおいが肺を満たし、呼吸をすればするほど、チンポ臭を反芻してしまう。

太腿の内側を擦り合わせる動きが多くなり、腰を捻るのも無意識だった。繊細な手つきでサオをくすぐりながら、人差し指で先走り汁をのばす。

「あぐっう、む……んぶっ、ふええれお」

「素直になってきたじゃねえか。ハア、そうそう！」

男たちはエリカの頭を乱雑に撫で、口淫奉仕を急かした。少しでも刺激が途切れようものなら、唇への挿入を深めてくる。



「な、なんかすげえな」

目にも官能的な悦よがり姿にあてられ、男性客は顔を赤らめつつ背けた。エリカを異常者扱いしながらも、火照った牝の肉体に興味があるらしい。

漆黒のライダースーツはジッパーの最後まで綻び、白い巨乳を開放的に弾ませた。自覚なしにエリカは空腰を打っているのだ。

「お願いだから、んはあ、あつち……あつち向いててちよおだい、ええはあつ！」

ディルドーを握るだけでなく、自ら生乳を揉みしだく。今まで我慢していた分の反動が欲求を一気に増大させ、もう慰めずにいられなかった。

「とめられないの、あん、私！ だから見ちゃ、くふううん！」

盛り上がった柔乳の先端を、慣れた手つきで器用に捏こねくりまわす。自分の身体のこと
は自分が一番知っており、どこを刺激すればよいのか、考えるまでもない。

ヴヴヴヴ！ ヴヴヴヴヴ！

ディルドーが右に傾いては、戻ろうとして左に傾きすぎてしまい、膣穴を捻った。衝動
みたいな快感が全身を駆け抜け、エリカをひとりの女から一匹の牝へと変えていく。

「はあつ、んあぁ……あ？ だめ、えあふ、抜きたいのに……」

ぐりぐりと手首を返し、自ら肉穴を攪拌する痴女の有様に、観衆は騒然とした。

「マジでオナつてやがるぞ？ この女、ここがどこかわかってねえのか？」



「で、でもさ……ちよつとすぐくない？ 変質者なんてレベルじゃないでしょ」

驚きや軽蔑を通り越して、呆れる者がいれば、逆に感心する者まで。せつかくの端麗さを台無しにする痴女の自虐的なオナニーぶりに、誰もが目を見張る。

（したくつしてゐるわけ、ない……でも！）

パイプを引き抜くつもりだった利き手は、むしろ押し込む動きを織り交せていた。

仕事に戻れと命令されただけで、「肌を見せて股を捻げろ」とまでは命令されていない。にもかかわらず、オナニーを披露してしまっている自分自身がイヤらしい。

「あつああ……ひろがるつ、はあん、ひろがつちやうのお！」

ディルドーを扱けば扱くほど、膣内に振動が行き渡った。快樂神経に甘い悦痺れがばらまかれ、発情汁を煮え滾たぎらせる。

甘酸っぱい牝のにおいはエリカ本人を酩酊させた。「やめられない」と「やめたくない」がない交ぜになり、オナニー遊びを繰り返してしまう。

肉穴からは液が溢れ、ショーツもろともライダーズーツの股底を潤わせた。

「だ、誰か、はやく……警備員れもなんでも、んあはつ、呼んへつたら！」

うっとりとした目つきが観衆を驚かせると同時に、エリカの視界を滲ませる。唇は玉の涎をぶらさげ、もつれる舌が言葉を妨げた。

群集の驚きに比例して、恥ずかしさがごうごうと燃え上がる。

(オナニーしちゃってる、私……オナニーしてるう！)

衆人環視だからこそ、自分がいかに淫らな行いをしているのか思い知らされた。

人前でオナニー。それもチンプの形がついた玩具を使って。

「んあふ、だめ……ヘンになりそう、っあはあ、これ以上はもお！」

見られることは同時に「見せる」行為であることに気付いてしまった。単純にバイブの刺激だけではない、倒錯した興奮がエリカの発情をヒートアップさせる。

最初はどよめいていた観衆が次第に押し黙っていった。

「まだ続けんのか？ おいおい……」

「えはああんっ！ とめてっ、ばいぶ！ ばいぶとめてえ！」

企業ブースの一角で、エリカの嬌声のポリウムばかりが大きくなる。

バイクのリアキャリアに跨りながら、エリカは昂る肉体を小気味よく弾ませた。人気の鋭角な大型バイクにライダースーツの曲線を繋げ、しなやかな腰で波を打つ。

紫色のブラジャーもショーツも、過剰な露出を彩るだけのアクセサリーだ。赤いロングヘアは乱れ、汗だくの巨乳に絡みついている。

「んはっくう、ほんとに……らめっ、こんなにブルブルってされたら、いいいッ！」
歯を食い縛った表情に力はなく、三秒と持たずに眉が折れた。

拒絶の側にあつて淫欲に吞まれつつあつた意思が、いつの間にか淫欲の側にあり、拒絶

へと戻れなくなっている。

流麗な曲線を汗まみれにしながら、発情期の肉体は下の穴からも涎を垂らした。光沢を艶とする柔肌が、不特定多数の視線を浴びて上気する。

「何があつたんですか？　ちよつとどいて……うわあああつ？」

ようやく駆けつけてきた警備員も絶句した。野次馬が妙に静まり返っている理由を即座に理解したのでろう。

新作バイクに跨つてのオナニーショーが、パイプの音をうるさく鳴らす。

「ひはあああッ！　も、もうほんとに……このままじゃ、んふあつ、えはああ！」
ぱっくりと開いたライダーズーツから色気がムンムンと溢れた。

例のカメラマンに限らず、興味本位で携帯のカメラを構える者も出始める。

「すげえな、これ……ダチにも教えてやらないと」

見られて、撮られて、物色されて。それと同等に蔑まれ、奇異の視線を向けられて。新しく列に加わつた者が、二言三言は軽蔑の言葉を吐き捨てる。

「明日はイヴだつてのになんなの？　彼氏いないからつて自棄になつてるとか？」

それほどの辱めを受けてなお、エリカは肉体の昂りを禁じえなかった。

（へんな女つて思われてる……人前で、オナニーなんかして……）
自分自身がたまたまなく卑猥な生き物に思えてくる。

気持ちのうえでは恥ずかしく、惨めなはずなのに、エリカの表情は艶笑さえ浮かべつつあった。みっともなく舌を出し、パイオオナニーに汗だくで悦がる。

「んむふう！ あっうあ、だめ……き、気持ちよくなっちゃっへるのおお！」

火照った肉体は浅ましく快楽を求め、ディルドーを振りまわした。それを掴んで扱くエリカの声色が、また一段と甲高くなる。

熱っぽく喘ぎながら、牝痺れを子宮まで届かせてしまう。非常識で異常なこと、と頭ではわかっていても、肉体はオナニーならではの手軽な快楽に病み付きになっていた。

「このオモチャが勝手に、えはあつ、動くだけで！ わたひ、へあつあええ？」

弁解するものの、張り形を抜いては説得力がない。生殖穴ばかりではなく、巨乳を強めに押し揉んで、快感の数を闇雲に増やす。

複数の携帯電話がライダー美女の痴態を激写していた。最初からカメラを構えている男がいるせいで、ほかの連中も遠慮しない。女性さえ撮影をする始末だ。

「これってヤバくない？ イきそうになってるって、絶対」

「どういう形になってんだろうな。なんつーか、中のほうは……」

皆がエリカを痴女とみなし、見下している。

それを自覚するほど、身体を打ち震わせる高揚感があった。

「なかに入ってるのも、はあ、ちんぽのカタチで……んあふつ、イイんです！」

自然とですます調になり、観衆に玩具の性能を語り出す。オマンコを太いチンポの形で
拡げられていては、痺れに悶えるしかない。

もうバイクを宣伝しているのか、パイプを宣伝しているのか。

淫らな興奮が牝の肉体をさらに燃え上がらせる。とうとうエリカはカメラに向かって股
を拡げ、生々しい形状のディルドーをひけらかした。

「これと同じカタチのが、へああつ、おお、おくとどいへ、えあつあ！」

それを激しく扱き、膣内のパイプを膨縮させる。すると本物のペニスが脈を打っている
ようにも感じられ、セックスの気分をどこまでも盛り上げてくれた。

ヴヅッヴ！ ヴヅッヴヴヴ！

尿口とGスポットにも突起が嵌まり、振動が枝分かれする。おまけにクリトリスを刺激
され、膣の感度はよくなるばかり。

「こんなオナニー！ ああん、知らないつ、はあ、よすぎてとまらないのお！」

気持ちよすぎるから止められない、と本末転倒な言い訳をしながら、エリカは夢中で腰
を振っていた。それこそ相手の男性が見えるような、艶かしい腰つきで。

軽やかに手首を返し、ディルドー越しに膣肉を攪拌してしまふ。

ヌチャヌチャ！ グチャ、グチャグチャッ！

刺激を与えることがダイレクトに悦びよびとなった。頭の中はぼうつとして、痺れは脳まで

達している。もう快樂を食ふことしか考えられない。

(だめ……イかなくっちゃ、だめ……!)

いつしか拒絶の対象は果てるのではなく、果てずにいることにすり替わっていた。皆の前でデイルドーをぐいっと捻り、肉唇を見せびらかすように穿り返す。

「あつはあああん！ イクう、えあつは！ これイっちゃう！」

肉穴は濁った洪水を起こし、野次馬たちが鼻を摘まむほどのおいを漂わせた。

しかし誰も「臭い」と口にしない。じっと目を見張り、露出狂の美女が果てる瞬間を今か今かと見守っている。

腰のついでに巨乳も汗いっぱいに弾ませて、エリカは喘ぎのペースを上げた。艶やかな深紅のロングヘアをまといながら、節操なしの下品で淫乱な自慰に没頭する。

「ぐりつて！ イクの、へああん、おくう！ しきゆうにひてつ、えへええええ！」

朦朧もうろうとした頭では、感じてはいけない理由を見つけられない。

人前で自慰に耽つてしまえることは、恥ずかしさと同等かそれ以上の優越感すらもたらした。もしかすると、エリカのオナニーを羨ましがっている女性客もいるのかも。

「ふたり一緒に使えるのよ？ これ、んえああ、ほら、ここにもお」

デイルドーを扱きながら適当な女性に目配せすると、逃げられる。ギャラリーは男性の数が多くなり、誰もがあからさまに股間を意識していた。

「すげえ……まじでここでイクのか？」

観衆の間には「このまま見届けよう」という無言の同意があるようだ。わずかに残った女性もエリカの痴態をねめつける。

オナニーマニアは右手でディルドーを抜き、左手で巨乳を揉みしだくので大忙し。

「いつてから！ イっへからせんぶ、あはあ、んくう！ かんがえるからあ！」

ライダースーツの残りも脱ぎたがっているような腰の暴れっぷりで、発情期のおいと悶え汗をふんだんに散らす。

脚を大きな八の字に開いて、エリカは肉体の熱すぎる発作に悩乱した。

「きちやう！ これもうっ、んああ！ わた、わたひ！ ヘンなオモチャで！ ちんぼのカタチでぐりぐりっへ、んいいいいッ！」

支離滅裂な言葉を喘ぎに織り交ぜながら、ディルドーを自慢げに宣伝する。

快楽神経に電流じみた痺れが走り、過熱を極めた。尿口にもGスポットにも、そして子宮にも同じ振動が伝わり、一匹の牝をエクスタシーへと打ち上げる。

「オマンコいいっ、イク！ イクっ、いいイク！ ちんぼのかたひれ、えへ、イっひゃうのおおおおおおおおおおおおおおおおお——ッ！」

肉穴が窄まるように収斂し、きつくなった合わせ目から熱水を噴き散らかした。
プシヤアアアアアアアアッ！



余韻に浸る間も惜しんで、牝ウサギは両脚を上げ、嬉しそうに微笑んだ。

☆

軽い失神に陥っていたエリカを、男のひとりが揺さぶって起こす。

「うはあ？ んあ、私……」

「いつまでも寝てんじゃねえよ。次はあんたの番だぜ」

エリカはスクリーンでそれを目撃し、声にならない声を上げた。

「な——ッ!？」

リアルタイムで流されているはずの映像の中で、ユイが大勢に輪姦され、しかも笑っているのだ。ネットからの書き込みも氾濫し、少女の「便所デビュー」を祝っている。気を失っている場合などではなかったのだ。

（そんな……ユイがあんなふうにな）

膝からくずおれている自覚もなく、エリカは瞳を強張らせて愕然とする。

「おう！ おくにきてるの、えへあ、ちんぽ！ ゆいのおまんこに、れああ！」

裏チャンネルを調査していた時、顔の知らない少女のレイプ動画を見つけ、込み上げるのは嫌悪感だった。

（私のせいでユイが……!）

それが馴染みの深い女の子の強姦シーンとなつては、真つ暗な眩暈めまいに襲われ、まともに

立つてすらられない。

男どもはSPまでも服を脱ぎ捨て、輪姦パーティーに交ざってきた。

「さあつて、次は姉ちゃんだ！ チンポスロットで遊びたくなってきたら？」

「は、放して！ ユイも今すぐ解放しなさい！」

動揺のあまり背後からの奇襲に対応できず、長身のパニーガールは三百六十度をペニスとカメラで包围される。腕の拘束は解かれたが、逃げ場などどこにもない。

巨大スクリーンに今度はエリカの姿が映し出された。

『エリカさんキター！ ユイちゃんですかなくてよかった！』

『こんなの見てオナってる俺らのクリスマスも大概だな』

目的の零時まであと十分もない。この宴を盛り上げつつ、トラップに失敗がなければ、エリカたちの勝利が決まる。

（ユイに時間稼ぎをさせたんだわ、私……）

だが、そのために年下の少女をレイプ場に放り込んでしまったことが、鋼鉄の正義感に亀裂を走らせた。彼女に仕事を手伝わせ、巻き込んでしまった責任はエリカにある。

「く……やるならあの子より、私をやりなさい。ユイは解放して！」

「もう遅えよ。処女マンが中出しされるとこは放送されちゃったからな」

動揺混じりの挑発など連中には通じなかった。それ以前にこのパーティーでは、パニー

ガールに発言権は認められていないのである。

すでに女探偵の絶頂ぶりを目の当たりにしている男どもは、ペニスを隆々と勃起させていた。膝立ちの姿勢でいるエリカにいくつも手が伸びる。

「へっへっへ、デカいなあ！ 何キログラムあんだよ、これ」

蜘蛛みたいな手つきはふたつの巨乳に群がり、麓から乱暴に揉みしだいた。

「うくう、放しなさいったら……んあつああ？」

反抗のつもりで口を開いたのに、声が露骨に上擦つてしまう。

たわわな乳果は汗でべとつき、充分すぎるほど温もっていた。エリカの意思とは無関係に、その柔らかさがあらゆる悪戯を受け入れてしまう。

集団による愛撫は巨乳の高さで合流し、かつ入り乱れた。順番に乳頭を摘まんでは、強く引つ張り、バニーガールを苦悶させる。

「触らないで、つはあ、おっぱいは！ そ、そんなふうにしちゃ！」

ポリウムたつぷりの巨乳は複数の手で抱え上げられ、抜群の存在感を放った。すぐ下では腰が頻繁にくねり、もどかしそうな仕草にも見られてしまう。

『見てるだけでたまんねえ！ はやくやってくれよ！』

「じゃあ俺からいただくとするか。これ挿れちゃうぜ、ウサギさん。へっへ！」

かぶりを振った回数だけロングヘアを乱したエリカに、正面から一本の肉棒が迫った。

ほかのどれより亀頭が肥大した「先太」で、黒バニーの牝穴に狙いをつける。
エリカはごくりと咽を鳴らし、汗ばんだ太腿を閉じ合わせた。

「だ、誰が！ はあつ、あなたなんかと……」

しかし嫌がれば嫌がるほど、かえって陵辱者どもの嗜虐心を煽ってしまう。

バニーガールの豊満な肉体は濃厚な色香を漂わせ、居合わせた男性全員の目を釘付けにした。肉棒がいきり勃ち、生臭いカウパーを滲ませる。

反抗的で気取った性格でありながら、頬を赤らめるエリカの感じやすさが、マゾの魅力
を醸し出しているのだろう。

「きゃ？ 何人集まってきたのよ、んふあ、こいつら！」

後ろからふたり掛かりで両腕を押さえられ、股間もこじ開けられる。

「カメラにマンコ見せ付けてるスケベが、よくもまあ強がつていられるもんだ」

そこを前方からカメラで覗き込まれ、恥ずかしさが悔しさを上まわった。端正な顔立ち
にしては眉が引き締まらず、瞳に長睫毛の影が掛かる。

（撮られてるんだわ……！）

秘裂はさつきビッグシックススでほぐされ、肉唇が食み出してしまっていた。

光沢が艶めかしい黒色のバニースーツは、ハイレグカットを股間の脇へと逸らし、秘裂
を曝け出している。網タイツもびりびりに千切れ、残っているのは性毛だけの有様だ。

手入れを欠かさない大人びた女の形に、閲覧者たちが感心する。

『マンコの毛にしちゃ綺麗すぎる。ちゃんとリンスしてるな、こりゃ』

「くっ……勝手な想像、はあ、ばかりして……！」

肉感的な脚線も美しく、ハイヒールの爪先まで一流のレディを誇っていた。

にもかかわらず、中央の牝花弁がくばあと開き、薄いピンク色の粘膜を覗かせる。それこそがエリカの肉体が隠し持つスケベな本性。

肉唇の内側にはクリトリスと膣口が隠れ、ひくひくと疼いた。外気にさえ触れることができるほど敏感で、男の視線を一点集中させ、過熱する。

「うあはあ、あ……ほら、これでもう、あの子の番は終わりでしょう……？」

女探偵にとって作戦上、乱交が長引くことはむしろ都合だった。しかしそのためには犯されなければならず、すでにユイを陵辱者どもの餌食にされている。

身体の震えは恐怖によるものだけでなく、直接的な刺激にも引き起こされた。

「すぐにコイツをぶち込んでやるぜ？　へへへ、ウサギちゃんよお」

「そ、そんなところから？　待って、やめなさいってば！」

てつきり正面の男が、と思っていたせいで虚を突かれてしまう。

ペニスは後ろから現れて股座をくぐり、カメラにスマタを見せ付けた。相当興奮しているらしく、ずぶ濡れの秘裂に触れるサオが熱い。

エリカを貫くべく、これも先太の形に膨れ上がっていた。

「おいおい、俺が最初にやるつもりだったのに。まあフェラで一発又いとくか」

目の前には一本どころか二本、三本と怒張が集まり、奇妙な群れを成す。肉の鉄格子に閉じ込められたバニーガールに術すべはない。

「こんなたくさん……む、無理よ、できるわけ……」

「ウサギなら跳ばないとな。おら、上に乗って自分で挿れろ」

背後の男が仰向けになり、ウサギの尻尾をぐいっと引っ張った。

「きゃ？ うあ、動かさないで！ んうっはあ」

背中越しに跨るポーズを取らされ、かろうじてエリカはハイヒールで踏ん張ることに成功する。だが大してつらい姿勢でもないのに、息を吐くごとに憔悴させられた。

（カラダがもう、ダメだわ……アソコがウズウズしちゃって）

昂りすぎた肉体は恥汗と精液でぬめ光り、マゾの色気をムンムンにまとっている。

「はやくしろよ。じゃないと、俺もユイちゃんのほうにいつちまうぜ」

「す、するつたら。……ちゃんと自分で」

エリカはストレートヘアの下からお尻を突き出し、肉棒の真上まで牝穴を運んだ。ウサギのお耳を倒し、見下ろす角度で位置を確認しながら、はつとずする。

（ユイを助けなくっちゃいけないのに、私……）

いつの間にか男どもの命令に従ってしまっているのだ。零時までの時間稼ぎ、という思考もセックスをつい正当化し、エリカの脳裏を混濁させた。

肉洞を淫液で氾濫させるほど、淫らなウサギになっているのを実感する。

「あうう……勘違いしないで頂戴？ 私もユイも、っはあ、こんなの望んでるわけ」

声には張りがなく、眉もしおれていては説得力がなかった。見られる恥ずかしさと、自分の身体のいやらしさに紅潮し、胸を高鳴らせる。

「よく見ろよ？ 俺のチンポ、面白いモンがついてるだろ」

狂気じみた剛直はすでに膣口へと差し掛かっていた。サオの根元には突起つきのリングが嵌められており、意味深な形である。

(……撮影されてるの？ こんなところまで)

しかもリングには小型のカメラが内蔵されているらしく、バニーガールの股間がズームされた。肉唇が雁太に液を塗りたいく有様が、エリカの羞恥心を燃え上がらせる。

それでもエリカは裸の巨乳を抱えつつ、おもむろに腰を降ろしていった。肉唇の合わせ目が内側にひしゃげ、先太のチンポを呑み込んでいく。

ズブズブズ！ ズブズブズブ！

「んひいいいい……っ！ はいってる、へあつ、あくううううう！」

これが激痛であつたら逆に耐えることができたかもしれない。けれども歯を食い縛った

くらいでは痛みが生じず、拡張感の淫猥さを断ち切ることはできなかった。
エラ張った亀頭が膣の狭さをかいくぐり、子宮まで届く。

「まだまだ、ハア、これからだぜ！」

「へはあつあ？ なっ、なんなの、これ……えひえああああ！」

下から揺すられると、リングの突起が性感帯の一部にめり込んだ。

セックスと同時に、膣前庭の裏手にある、Gスポットを刺激するための形らしい。そのせいで粘膜はいつそう感度がよくなり、肉棒を奥へと誘い込むように締め付けた。

結合部から玉袋へと淫液が伝い落ち、小型カメラのレンズも曇る。これでは性粘膜がピンク色であることしかわからない。

『メチャクチャ濡れてるじゃねーか！ スケベなウサギだw』

「なんだよ、さっきまでの威勢はどうした？ そんなにリングチンポがよかつたか」

リングの効果は男に説明されるまでもなく、感じやすい肉体で思い知らされた。視界が揺らめき、瞳に熱い涙が滲んでいるのを自覚する。

なのに男どもに向かつて、嫌がる表情を作り出せない。

「んはああああ……！ やめて、これっ、リングだけでも外してえ！」

翻弄されてしまっている悔しさが込み上げて、おねだりみたいな声が出た。

バニーガールの悩ましい悶えぶりにあてられたのか、ほかのペニスも群がってくる。肉

棒を櫛にしてストリートヘアを梳かれるうち、髪のほうが粘りを引くのがおぞましい。

「俺たちもスロットマシンで遊ばせてやるよ！ レバーだぜ、ほら」

「ちよつと？ いっぺんに来られても、あつあひいいい！」

エリカは両手で適当なモノを一本ずつ握り、お腹に息みを利かせた。下の男が予告なしに肉穴を突き上げ始めたのだ。

「こいつは具合がいいぜ、最高だ！ ハアツ、ギッチギチに締め付けてきやがる！」

「うごかさない、れつたらあ！ ああん！ 擦つちや、へあつ、れへえああ！」

そのリズムに強制的に乗せられ、バニーガールの腰も得意のダンスを始めた。お腹と背中で波を打ち、涎やら精液やらでどろどろの豊乳を弾ませる。

ヌチャチャツ、ヌチャ！ グチュヌチュ！

ウサギのお耳だけはピンと立っているものの、騎乗位の姿勢は今にも崩れそうになっていた。漆黒のパニースーツは股布が振れた分、お尻にきつく食い込んでいる。

「ひんいい！ えぐれるう、んへあ！ アソコのながえぐれちゃう！」

それでもエリカは腰で器用に重心を保ち、ボディスーツの股底をくぐる網タイツの残りを引き千切った。セックス相手の機嫌でも取るかのように、ウサギの尻尾を転がして。

勃起の硬さは確実に子宮に届き、エリカに鮮烈な牝痺れをもたらした。騎乗位ならではのピストンの深さが早くも癖になつてしまう。



「あはん、だ、だめえ！ おくにあたつへ、えああん！ 突いちやあつ！」

「自分で腰振つて、ハア、よく言うぜ！ 気持ちいいんだろ？」

しかもエリカは催促するみたいに、握ったペニスを巧みに扱っていた。グローブが余計に握力を高め、サオをぎゅちりと締め付けてしまう。

左右の肉棒に掴まって悦がるパニーガールの、マゾヒスティックでスケベな有様は、裏チャンネルで大盛況だった。

締まりのない表情のアップへと、侮辱のコメントが投げつけられる。

『すげえ勢いの騎乗位だな。チンポが曲がるんじゃねえの？』

『これはセックス狂のカオだわ。今まで見てきた女ん中でも、ダントツでド淫乱』

女探偵の顔は汗が浮かぶほど上気し、唇から灼けた吐息を遠ざけられずにいた。長睫毛に隠れがちな瞳を見開くのは、怒張が子宮を殴った瞬間だ。

「あはああう！ とめて、あん！ 誰か……あいい、とめてつたらあ！」

ビッグシックスの時も「とめて」と訴えたが、セックス中のほうが息継ぎが多く、声色は格段に悩ましい。媚び上手な腰つきで、肉棒にエラ張りの硬さを要求する。

(だめ……感じる、感じちゃってる！)

快楽に抗うには肉体が快楽を知りすぎてしまっており、脅迫的な誘惑に駆られた。自ら腰を振っている自覚は鮮明にあり、とめたいのならばよいこともわかっている。

それでも食べるのをやめられない。

ズチュヌチュ！ グチャツ、ヌチュチュ！ グチャツ！

唇を噛んでもいられなくなり、エリカは涎の糸を舌で払いのけた。

「こんなのつけっ、えあ、つけられたら！ へ、ヘンになるに決まってるじゃない！」

忌々しいリングがGスポットを抉り、膣全体を痺れつかせる。

「言い訳するなよ。てめえが敏感ってだけだろ、ハア、このチンポ狂いが！」

「ひんぼぐるう、なんかじゃ……んああっ！ あふ、んうううう！」

セックス狂、チンポ狂いと貶められながらも、パニーガールは元氣よく腰で跳ね、お耳で頷くのを繰り返した。

『まじたまんねえ！ 俺もうオナホール三個目入ります！』

『一晩でザーメンメダル全部平らげそうな勢いだな』

不特定多数に見られ、笑いものにされるといふシチュエーションそのものが、エリカの鼓動を速くする。黒い絶望感よりも、真つ赤な高揚感のほうが遥かに大きい。

(ずっとネットで、見られ続けるんだわ……)

ふくよかな柔乳へと涎を垂れる唇が、命令されるよりも先に真正面の肉太を啜えた。

「んむう……へあつぶ、らめなのにい、えれお……ぶあっは！」

雁首の括れに吸い付きながら、赤腫れた龟头を念入りに舐めまわす。

併せてハンドシエイクもこなせば、乱暴な割に堪え性のない男たちが息を乱した。唇を独占する肉棒からはガマン汁も溢れ出す。

「やればできるじゃねえか！ うおっ、どこで憶えやがった、こんなフェラ！」

手袋の生地が摩擦となり、左右の剛直も亀頭を腫れ上がらせた。淫乱バニーガールまで届かないペニスは自慰がてら順番を待っている。

「テコキもなかなか……おいお前、もつとマンコ突き上げてやれよ！」

「ああおぐ？ えおつろお、へはあ！ おつおぐ！ おくにあたつひやう！」

深紅色のロングヘアを腰でかき混ぜるように、エリカは騎乗位セックスに悦がった。口奉仕は正面の一本だけといわず、つい欲張って、握っているモノにも舌を這わせる。

（ぜんぶ……どれもみんな、私に興奮してるんだわ……）

反りあがった形ならではの雄々しさも、皮の裏に溜まった濃厚な異臭も、女の自分にはない。これさえあつたらいつでも気持ちよくなれるのに、などという浅はかな発想が脳裏をよぎったが、狂ったものには思えなかった。

涎の糸をぶらさげた唇でも、濡れそぼった牝穴でも、チンポを存分に味わう。

「んむおごおおつ？ えれえお……ンッ、んぢゅうううううッ！」

発情期の牝ウサギは上目遣いをカメラ視線にして、肉太へのキスに鼻水を垂らした。唇を窄め、執拗に吸引すると、相手の胸震えがとまらなくなる。

「すげえバキュームフェラだぜ、ハア！ 俺のチンポを放しやがらねえ！」

「マンコの締め付けも、ヤ、ヤバすぎる！ 処女とは違う次元の狭さっつか！」

頭の中が官能的な酔いに満たされ、ぼうつとした。無理やりさせられているはずが、自発的にペニスを貪ってしまっている自分に驚く。

「えもおれ……へあつむ、ンツ！ んぢゆうう、はあ！ ぷあつへ」

現に一度も「しゃぶれ」と命令されていないのに、頬張っているのだ。

男性の味わい方を知ってしまったている肉体は、牝穴を窮屈に狭め、勃起の抜き挿しに嬖を絡めた。派手な猥音を鳴らしながら、扱くというより咀嚼する。

グチュツ！ ズチャツ、ヌチャ！ ズチュツ！

「これいじょうは、ひあつおむ！ んむふ、えあつあええ！ もどれなく……ンぐつ、もろれなくなつひやう、へあ、からあ」

それこそウサギ跳びでもするみたいに、エリカは脹脛ふくらばきの上で太腿を弾ませた。しこりつつ乳頭を、握ったモノの先端に狙って当て、硬さを競う。

女探偵の行動原理は快楽にすり替えられ、火照った肉体はより強い痺れを求めつつあった。ペニスリングの突起でGスポットをぐりつと抉られるのも心地よい。

「あはああ？ あたっちゃやう、そこ、へああ！ そこに硬いのきちやうの！」

快感に抗う手段はない一方で、快感を得る手段は全身にある。

チンポの数をものともしない黒パニーの、欲張りで艶めかしい悩乱ぶりは、見ているしかない連中のコメントを殺到させた。

『今すべてのAVが過去になったかもしれない。歴史的瞬間』

『女が見てもオナニーしたくなるんじゃない？ コレ』

巨大スクリーンでエリカの、亀頭をみつつも並べて一緒くたに舐めまわす舌技がアップになる。その表情はうっとり惚け、美味しそうにご馳走を見詰めていた。

(だめ……もう時間が……！)

そうしている間にもタイムリミットの零時が迫る。

タイムオーバーがあることに男どもはまだ気付いていない様子だった。私立探偵の豪胆な作戦通り、裏カジノの存在は間もなく世間の目に晒されるだろう。

ただし代償として、エリカはユイとともに乱交パーティーの奴隷ウサギを演じなければならぬのだ。健全な一般の視聴者に目撃されてしまう——それを想像すると、発情期であつても悪寒を禁じえない。

「すつ、少しだけやすませて……んあむつ、ひはあ、お願いだから……」

エリカの腰つきは次第に緩慢になり、正直な肉穴さえ疼きを堪えた。しかし奴隷を休ませまいと、伏兵がもうひとつの急所を奇襲する。

「どうした？ おら、チンポのことしか考えられなくしてやるぜ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!